

栄養素から見た生活者に対する環境の影響に就いて  
 伊藤健彦研究所  
 伊藤秀三郎

目的

生活を侵襲する因子として、今回は生活空間の大きさを調べ、動物(マウス)実験ではあるが、栄養素に注目して、影響の様相を検討する。

方法

実験動物には雌雄を用い、飼料は市販の固型粗飼料を使用する。飼料のメーカーは、オリエンタル酵母工業(株)、MFマウス・ラット・ハムスター飼育用での組成は水分 9.27%、粗蛋白質 9.13%、粗脂肪 2.22%、粗繊維 4.16%、粗灰分 7.10% 及びビタミン B<sub>1</sub> 511.98% で、自由給餌であり、24時間中マウスがいつでも自由に摂取できるようにする。

尚飼育は早大教育での体育研究室で行い、計測は和洋女子大学栄養生化学実験室で行う。

計測は3日目毎とし、飼料摂取量、糞便量、糞便中の蛋白質及び脂肪の含有量並びに消化吸収率を定める。

実験者は和洋女子大自身の管理栄養士坂本典子、南谷子及び林園子である。

結果

飼育ケージは金網製5連で、サイズをエハは間口15cm、た216.5cm及び奥ゆき21cmである。生活空間の大きさ、Lは2連、Cは1連及びSは0.5連である。

消化吸収率には大程相違がないが、発育状態には悪くなる傾向が、特にSの方にある。